

村上一枝

カラ=西アフリカ農村自立協力会(CARA) 代表

もてるものを出し切った支援で、 マリの人々の自立した生活を実現



© Iizuka Akio

村上一枝

Kazue Murakami

カラ=西アフリカ農村
自立協力会(CARA) 代表

1965年、日本歯科大学歯学部卒業。1984年、歯科医院を開業。1989年、マリ共和国へ。ボランティアとして植林活動に参加。以後マリに居住。1990年、マリ NGO「コマン協会」の個人ボランティアとして、村民調査後、衛生環境改善、女性適正技術指導、学校建設・識字学習普及、裁縫・識字教室の開催、小学校の建設に携わる。1992年、「マリ共和国保健医療を支援する会」設立。1993年、「カラ=西アフリカ農村自立協力会」へ名称変更。看護婦・助産師を養成、助産院の建設開始。1994年、クリコロ県クーラ郡ドワンバ郡(57村)へ支援事業を開始。1998年、「カラ=西アフリカ農村自立協力会」代表に就任。2000年、クリコロ県シラコロラ郡(30村)支援事業開始。

推薦者 | 中原 泉 日本歯科大学 学校法人理事長

彼らの潜在的な能力を引き出す

村上一枝氏がマリ共和国に降り立ったのは1989年のこと。1年間の植林ボランティアののち、現地の NGO 組織との出会いでマディナ村へ。そこで取り組んだのは、特に女性の“自立を促す”ことだ。まず家を一軒一軒訪問して、家族構成や疾患の有無、出産・流産の回数、トイレや台所の衛生状態などを調査した。その結果を基に課題を洗い出し、母性保護やマラリアの予防といった保健・衛生環境の改善に着手。同時に、女性が自らの手で稼げるように導いていった。こうした活動を2年間行った後、1992年に「マリ共和国保健医療を支援する会」を設立する。この活動は多くの村へと広がり、取り組む内容も多様になり、さらに深化する。識字率向上のための学校建設、作物栽培や飲料水確保のための井戸の設置、安全な出産のための助産師育成と産院の開設。現金収入を得るための石けん作り、刺繍技術の習得、作物栽培などだ。彼らは教えれば砂に水がしみこむように吸収をしていく。学ぶ機会に恵まれてこなかっただけで、本来は知性の高い人々だ。女性達が収入を得られるようになると、夫からも尊重されるようになった。村上氏が目指したのは、こうした取り組みを、村民たちの手で循環・再生させること。教えるだけでなく、自律的にコミュニティを運営できるよう後押ししたのである。支援活動とはすなわち、彼らの潜在的な能力を引き出すことに他ならない。

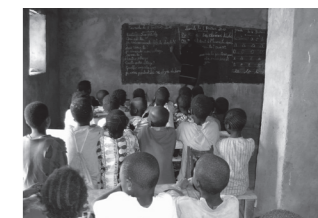
尊厳をもって生きるために

なぜ村上氏は、盛業だった歯科医院を閉じてまでマリに向かったのだろうか。サハラ砂漠を観光で訪れた際に、西アフリカのマリ共和国に足を踏み入れる。そこで“豊かな日本より、この国のほうが、自分にできることがあるのではないかと、心の奥底



村の産院で働く助産師たち。青いユニフォームは憧れの的だ

から突き上げてくるものがあったのだという。マリは、先進国なら普通に予防・治療ができる病気で大勢の人たちが亡くなっていた。思い立ったら即行動が身上の村上氏。1989年8月には閉院し、9月末にはマリに降り立っていた。



村の学校で学ぶ子どもたち

村上がもっとも心を砕いたのが女性のヘルスクエアだ。学校すら行かせてもらえない女性たちに読み書きを教え、助産師および健康普及員へと育成。識字できない人々に口述で、健康知識や新たな衛生常識を広めた。その間に産院を建設。結果として母子ともに死亡率が大幅に低下する。11ヶ所の産院を作ったほか、40村以上に200人の健康普及員を育成。地域のリーダーとして、口述で自ら健康知識を広めていく仕組みをつくった。彼らのおかげで不衛生由来の下痢が減少。人々が予防接種を進んで受けようになるなど、具体的成果が上がるようになった。村上氏はかねがね、“もてるものを出し切ってゼロになって死にたい”と口にしてきた。私財をも投じたマリへの援助は、彼らが尊厳をもって生きていくための糧となり、大輪の花を咲かせている。